

～性的少数者の人権～

～性的指向～

**「多くの人が差別心を持っていると思う。
でも、相手を“知る”ことでその気持ちは
なくなると信じている」**

中学校1年生の時、初恋の相手は女性だったと話すOさん。自分は他の人と違うと考え、自分の思いを否定し、自己嫌悪に陥ったりして、とても生きづらさを感じていたそうです。今はご自身の性的指向について公表をしていますが、そこに至るまでには様々な葛藤があったそうです。

OOさんの初恋のエピソードが「りんごの色」で使われているんですね。

そうなんです。「りんごの色」を作成するとき、当初から関わらせていただき、内容について話し合いを重ねました。自分の初恋のエピソードが使われているので、読むと当時の心境を思い出し、はじめの頃は読み通すことができませんでした。同級生が、「あの男子かっこいい」とか「部活の先輩が好き」とかみんな話している中に入れず、自分は他の人と違うと感じていました。好きだという気持ちを抑え込むつらさがありました。

「りんごの色」とは

平成29年度に大分県が作成した、性的少数者への理解を進める啓発マンガ本です。大分県人権ホームページ「こころちゃんのへや」で全ページ読むことができます。

O初恋以後のことは

高校のときには、2人の方とおつきあいしましたが、いずれも女性の方でした。2歳先輩だった女性が自分たちのことを認めてほしいと、私の母親に手紙を書いたことから母に半ば不本意な形で、自分がレズビアンであることが知られました。当時は理解してもらえず、その後10年くらい確執が続きました。困みに、母との関係は今では良好で、今のパートナーと母もよい関係です。専門学校では、異性愛者だと思い込もうとして生きていました。自分自身が自分を受け入れられなかったんだと思います。大分県でレズビアンは私一人だとずっと思っていたのですが、仙台に住んでいる時に図書館に当事者の会の案内があるのを見つけました。その会に参加することは、今まで否定をしていた自分を認めることになるのでかなり勇気が必要でしたが、終了の5分前によく入室できました。そのことがきっかけで、同

じ仲間と出会い、徐々に自分自身を受け入れることができるようになりました。

○社会的にカミングアウトしたきっかけは何ですか。

特別支援学校の教員として働いた後、退職して青年海外協力隊に参加し海外にいる頃、アメリカで同性婚が認められたとの情報が地元の新聞に掲載されたと友人から聞き、なぜか大分でも理解が得られたと勘違いして、そのことを素直にうれしいと伝える旨のメールを新聞社に送りました。しばらくして、その新聞社から「当事者として記事にしたい。」との打診があり、新聞に掲載されることになりました。そのことは了承していたのですが、それまで、私の性的指向を母と、一部の友人にしか話をしていなかったため、多くの人に知られることよりも、今までの友人・知人たちが私から離れてしまうのではないかとこの怖さが強く、発刊当日はベッドから動けませんでした。しかし、予想に反して、周りの受け止め方は好意的で、結果的には良かったと思いました。それと同時に、セクシュアリティについて悩んでいる方からの連絡や相談が増えたことでどうにかしなければという想いが強くなり、今の講演活動や当事者交流会の開催に繋がっています。

ただ、この活動をし続けるつもりはありません。セクシュアリティは本来、ひとり一人ちがうもの。「LGBT」と分けることで「別物」にしてしまっているのが今だと思うので、その誤解が解かれれば、今の活動が必要なくなると思っているからです。

○周りの方にはどのようなことを望みますか。

好きになる対象がどの性別かは、本人が言わなければわかりません。今はカミングアウトしている人も増え、カミングアウトをしたからすごいと思っている人もいるかもしれませんが、私はそれは少し違うと思います。カミングアウトしたくてもできない人もいるし、今いる居場所を守るためにカミングアウトしない人もいます。それぞれの状況で本人が決めること。誤解を恐れずに言うと、「差別心」は誰にでもあると思います。ただなぜ差別の心が生まれるかは、その人自身の人となりを知らないからだと思います。好きになる相手が自分と同じ性別だとしても、それは特別なことではないと気づいて欲しい。知らないことやわからないことを避けて通るのではなく、直接聞いて理解して欲しい。性的少数者に限らず、様々な人がお互いを知るきっかけとなる場所を作るのが自分の理想です。